



向けられた人々の尊敬は、神への賛美を表しているのでしょう。

イエスは、ガリラヤ地方のナザレの町に行きました。ナザレの町は、イエスの両親ヨセフとマリヤの住んでいた地であり、イエスも三十歳までそこで過ごした故郷です。それゆえイエスは、ナザレのイエスとも呼ばれました。ある安息日にいつものようにイエスが会堂に入ると、会堂の役員は聖書朗読のために立ったイエスに、預言者イザヤの巻物を手渡しました。

イエスが巻物を開いた時、ある箇所が目にとまり、イエスはそれを朗読しました。この箇所が読まれたのは単なる偶然というよりも、聖霊の働きによることだったのでしょう。それはイザヤ書 61:1—2 の箇所でした。ルカ福音書によると、その最初の言葉は、こういうものです。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである」（ルカ 4:18）。

これは、まさにイエス・キリストを言い表したものと言えるでしょう。イエス・キリストの言葉と行いのすべては、神と聖霊に導かれているのです。

「貧しい人に福音を告げ知らせるために」の、「貧しい人」とはどのような人のことでしょうか。「貧しい人」とは、経済的に、またその他の理由で圧迫されている人のことで、そのあとに続く「捕らわれている人」「目の見えない人」「圧迫されている人」すべてを含む言葉です。

そして「福音」とは、「良い知らせ」という意味です。人間に届けられる「良い知らせ」——人間をこの圧迫から解放してくれる神からの知らせ——それが福音です。

人間を縛っているあらゆるものからの解放、その根底にある罪からの解放が、主イエス・キリストの宣べ伝える福音によってなされていくのです。

「キリスト」の元の言葉である「メシア」は、「油を注がれた者」という意味です。「メシア（油を注がれた者）」とは、神から遣わされる「救い主」のことです。

イエスが朗読したイザヤ書はこう続きます。「捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」（ルカ 4:18）。

「主の恵みの年」とは元来、50年ごとに「全住民に解放の宣言」（レビ記 25:10）がなされるヨベルの年のことです。「ヨベルの年」は、貧しい人々にとって恵みの年でした。貧しく圧迫された人々が、何の犠牲も代価も支払うことなく、無条件に解放と自由を与えられたのがヨベルの年です。

主の霊に満たされたイエスのイザヤ書の朗読は、人々の心と魂を惹きつけます。巻物を巻いて係の者に返し席に座ったイエスに、会堂にいるすべての人の目が注がれました。

本日の福音書は、イエスのこのような言葉で締めくくられます。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4:21）。

大切な言葉、必要な言葉は、誰の耳にも入らずに眠っては意味を成しません。大切な言葉、必要な言葉は、人に届けられなくてはならないのです。

そして人に届けられたその言葉は、現実の世界を動かしていく力となるでしょう。

主イエス・キリストは、貧しい人に福音を告げ知らせるために、神から遣わされました。

「貧しい人」とは、経済的に貧しかったり、何らかの圧迫を受けている人のみならず、「心が空っぽな人」も含まれているでしょう。

空っぽな心には、乾いた砂地に水がどんどん吸収されていくように、神の福音の言葉が染み渡っていくのです。

神は、捕らわれている人を解放し、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にしてくださる存在であることを、私たちはいつも覚えておきましょう。

私たちは、試練の時も、神の恵みを与えられた喜びの時も、いつも愛を根底にして、共に歩いて行きましょう。

お祈りをいたします。

神様。地球では、人間同士の争いによって住む場所が破壊され、復旧のめどが立たないまま、心身をすり減らしている人がいます。貧しい人に、生きていくために必要なものと、希望をお与えください。また、人々がおののく中で、愛に基づく勇気をふるい、厳しい状況に立たされている人をどうかお守りください。救い主イエス・キリストによって祈ります。アーメン

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 ネヘミヤ記 8章 1節—10節（新共同訳）

<sup>1</sup> 民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。<sup>2</sup> 祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。<sup>3</sup> 彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。

<sup>4</sup> 書記官エズラは、このために用意された木の壇の上に立ち、その右にマティヤ、シェマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが、左にペダヤ、ミシヤエル、マルキヤ、ハシュム、ハシュバダナ、ゼカルヤ、メシュラムが立った。<sup>5</sup> エズラは人々より高い所にいたので、皆が見守る中でその書を開いた。彼が書を開くと民は皆、立ち上がった。<sup>6</sup> エズラが大いなる神、主をたたえると民

は皆、両手を挙げて、「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずき、顔を地に伏せて、主を礼拝した。

<sup>7</sup> 次いで、イエシュア、バニ、シェレブヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、ヨザバド、ハナン、ペラヤというレビ人がその律法を民に説明したが、その間民は立っていた。<sup>8</sup> 彼らは神の律法の書を翻訳し、意味を明らかにしながら読み上げたので、人々はその朗読を理解した。

<sup>9</sup> 総督ネヘミヤと、祭司であり書記官であるエズラは、律法の説明に当たったレビ人と共に、民全員に言った。「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。」民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。<sup>10</sup> 彼らは更に言った。「行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えてやりなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」

### 新約聖書 コリントの信徒への手紙 — 12 章 12 節—31 節 a (新共同訳)

<sup>12</sup> 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。<sup>13</sup> つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。<sup>14</sup> 体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。<sup>15</sup> 足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。<sup>16</sup> 耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。<sup>17</sup> もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。<sup>18</sup> そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。<sup>19</sup> すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。<sup>20</sup> だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。<sup>21</sup> 目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。<sup>22</sup> それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。<sup>23</sup> わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。<sup>25</sup> それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。<sup>26</sup> 一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

<sup>27</sup> あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。<sup>28</sup> 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。<sup>29</sup> 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。<sup>30</sup> 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。<sup>31a</sup> あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。

教会讃美歌 382 番「ここは神の」1,2,3 節、375 番「神の息よ」1,2,4 節、350 番(楽譜 I)「わがたましいを」1,2,4 節、250 番「つくられしものよ」1,2,3 節、394 番「主よ終わりまで」1,2,4 節